

11月5日 年間第31主日

申 6:2～6 ヘブ 7:23～28 マコ 12:28～34

1. マコ

vv.32-33 「律法学者はイエスに言った。“先生、おっしゃるとおりです。……心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する”ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」

マタイとルカ両福音書の並行記事では、律法の専門家はイエスに対して敵対的に描かれていますが、マルコ福音書ではそうではなく、むしろ律法学者はイエスに褒められています。当時、ファリサイ派の人々がすべてイエスと対立していたわけではなかったのでしょう。

しかしやがて初代教会がユダヤ教と決定的に決別したことによって、律法学者やファリサイ派に対する否定的な見方が、多くのキリスト者の心に入って来たものと思われます。そのような色眼鏡が物の見方に影響を与えることは、今の時代にも私たちが日常的に経験していることです。

この問答の重要な点は、神を愛すること(申 6:5)と隣人を愛すること(レビ 19:18)をイエスが結びつけたことだとよく言われます。確かにそれは、イエスが強調されたことでした。初代教会の特徴の一つが、その強力な同志的団結であったのはそのためです(コロ 1:4、1テサ 4:9-10 参照)。しかし、それは元来イスラエルの信仰の基本的要素であったのであり、キリストの福音は教会にこれを再発見させました。

旧約聖書で隣人とはイスラエルの同胞のことであり、新約聖書で隣人ないし兄弟とは“すべての聖なる者たち”(コロ 1:4)、つまり救われた仲間のことを先ず第一に指していることに注目する必要があります。「神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです」(1ヨハ 4:21)、「兄弟を滅ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んでくださったのです」(ロマ 14:15)等はみな、共にミサをささげている仲間のことを指して言われた言葉です。

2. ヘブ

ミサがキリストの“ただ一度のいけにえ”(ヘブ 7:27, 9:12, 10:12)の記念であって、これに参加するすべての信者に救いをもたらすのは、イエスが復活して生きておられるからです。ですからミサにおけるその秘跡的再現は、決して“いけにえの繰り返し”(ヘブ 10:11)ではありません。私たちを救うのは“傷や汚れのない小羊のようなキリストの尊い血による”(1ペト 1:19)のであって、私たちは“神の母おとめマリアと使徒をはじめ、すべての時代の聖人と共に”(第二奉獻文)、みんなでその奉獻に参加します。

カトリック教会の熱心な信者の多くが、今も聖体拝領を個人的信心として大切にしているように見受けられます。しかし第二バチカン公会議は、ミサをはじめとする秘跡の共同体性を明確にしました(典礼憲章 11,14 参照)。交わりの儀において、主の共同体の交わりが目に見えるもの、人間的に体験出来るものにな

るという理解から、会衆は“奉納祈願からミサの終わりまでは立っている”と、ミサ典礼書の総則(21)は定めています(典礼の刷新／土屋吉正著 225 ページ 参照)。自分だけ拝領したら、まだ会衆が拝領を続けているのに、(もう用事が終わったように)さっさと着席してしまうのは、あまりふさわしいことではないのです。拝領の歌を、司祭の拝領が済んでからではなくて、司祭が秘跡を拝領する間に始めるのも(総則 56リ、119)、同じ理由によることです。

3. 申

ユダヤ人が日常唱える“シェマー”という祈りは、申 6:4 から始まっています。それは“神を愛しなさい”と“隣人を愛して、聖なる共同体となりなさい”とが結びついた掟で、その根拠は神が彼らを救って御自分の宝の民とされたということです。

ですから、隣人を愛していれば、それが神を愛することの代替行為になるという訳ではありません。言うまでもなく、私たちにとって神を愛するとは、“私たちの罪のために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられた”(ロマ 4:25)キリストを愛することであり、その福音を信じることです。“福音のために労苦する”(II テモ 1:8)ことから切り離された隣人愛は、ただの人間の自己満足に過ぎず、“富を天に積む”(マタ 6:20、ルカ 12:33)ことにはなりません。

v.4 「あなたは心を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」

今日の主日の朗読配分を通して、天上のキリストの語りかけを聞くことの出来る人は幸いです。主の方に向き直るなら、主が私たちの目から色眼鏡を取り除いてくださいます(II コリ 3:16)。

ハレルヤ、アーメン。

11月12日 年間第32主日

王上 17:10~16 ヘブ 9:24~28 マコ 12:38~44

1. マコ

典礼暦の最後の三主日の朗読配分は、終末と神の国の到来を主題としています。教会がキリストの福音によって歩んでいるとは、どういうことであるかを思い起こすことは、この期節の恵みです。

既にこの福音書は、「神の子イエス・キリストの福音の初め」(マコ 1:1)という書き出しで始まっていることを再確認しましょう。そして今、終末の予告が語られる直前に、このテキストが配置されています。それは、キリストの福音から切り離しては決して正しく理解し得ないものです。

マルコ福音書が成立した時代には、キリスト教はユダヤ教から決定的に分離していましたから、律法学者というのは過去の物語りの中の登場人物にしか過ぎませんでした。またイエスの語録伝承の中に登場する一人の貧しいやもめが、その翌日からどうやって生活していったかが福音書で問題となることはありませんでした。そうではなくて、現在の教会がキリストの福音によって歩んでいるとはどういうことなのかが、主題なのです。

キリストの福音は神の福音であり(ロマ 1:1-4)、キリストの救いは神の業であって(エフェ 1:3-7)、「あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです」(1ペト 1:21)という一点に焦点を絞ると、このテキストの本来の意図が明らかになります。実に教会は終末の完成に向かって、救済史の中を旅している共同体なのです(フィリ 3:20-21、1テサ 5:23-24 参照)。

2. ヘブ

v.28 「キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。」

私たちのこれまでの体験からすると、使徒たちが伝え、教会が使徒継承によって受け継いで来たキリストの福音を、主日のミサにおける司祭の説教で会衆が聞くことは、稀であったと言って過言ではないでしょう。それは信条によって、典礼書や各種儀式書などによって、また何よりも聖書によって伝えられて、私たちの手の届くところにありながら、多くの信者にとっては別世界のことのように感じられて来ました。実際多くの信者たちが、聖書に書かれている福音の使信(メッセージ)をそのまま聞くことは、今の時代には通用しないことでもあるかのように考えています。

そのため、宗教とは何か、信仰とは何かと、一人一人が独自に考えることによって、これを精神や思想の世界のことだと思ふようになりました。

しかし、キリストの福音とその救いは、人間の哲学や思想の産物ではありません。イエス・キリストは事実、御自身の血によってただ一度天の聖所に入って永遠の贖いを成し遂げ(9:12)、死者の中から実際に復活し

て、終わりの日に神の国に復活するすべての人たちの初穂となりました(1コリ15:20)。ですから現在私たちは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られているのです(1ペト1:5)。これがキリストの福音であり、神が今朝の朗読配分を用いて私たちに語ってくださっているものです。

3. 王上

v.16 「主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。」

この奇跡は、「イスラエルの神、主は生きておられる」(17:1)ことの“しるし”でありました。それは「主が地の面に雨を降らせる日まで」(v.14)の奇跡であって、特殊で一時的な出来事でありました。バアル礼拝との戦いのためにヤーウェによって遣わされた預言者エリヤを、ヤーウェはサレプタの一人のやもめによって養わせようとされました。エリヤから神の救済史の一端に関する言葉(v.14)を聞かされたやもめは、「行って、エリヤの言葉どおりにした」(v.15)のでした。

生きて、救済史を進められる、神の御手がそこにあるということが、このやもめの奉献の物語りの意味のすべてであったことを、理解しましょう。彼女は美談の物語りの主人公でもなく、後の時代の道徳の手本でもありませんでした。

そのように、現代の私たちの教会も、私たちがささげる主日のミサも、神の国の完成に至る救済史の中に置かれているということを理解することは、すべての信者にとっての現下の課題です。教会がキリストの福音によって歩んでいるとは、どういうことであるかを思い起こすことは、特別にこの期節の恵みなのです。

ハレルヤ、アーメン。

11月19日 年間第33主日

ダニ 12:1～3 ヘブ 10:11～18 マコ 13:24～32

1. マコ

イエス・キリストの終末の日の再臨を語るいわゆる“小黙示録”(13章)と呼ばれる部分が、主の受難の物語りへの導入として位置づけられているのは、使徒たちに起源することであると考えられます。教会とは、現在の迫害と殉教の中でキリストの十字架と復活の福音を証ししつつ、最後の完成を待っている共同体であると、マルコ福音書は理解しています。

終末とは、現在のこの世の終わりであって、イエス・キリストの再臨による新しい世の開始なのです。神の国は、今の世界と時代の中に実現するものではなくて、終末を超えてその次に新しく到来する世であるとイエスは語られました。使徒たちは、それが主の受難と復活の意味を理解する重要な鍵であることを証言したのです。

v.32 「その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」

その日を待つという“信仰の目を覚ましている”ことは、実にキリスト者にとっての死活問題であると、原始教会は理解していました。

この「子も知らない」という言葉を典拠の一つとして、“キリストは神に従属し、本質的の神性を持たない被造物である”と主張したアリウス派が、4世紀の教会に深刻な危機をもたらした経緯をここで紹介してみましょう。313年のミラノの勅令を境として、ローマ世界においてキリスト教は時流に乗る宗教となりました。このため教会は、今や教会内に群をなして入って来た多くの異教の人々に教会の教えを適合させようとして、キリスト教独自の神概念を見失う危険に陥ったのでした。全世界がこの論争に加わり、アリウス派の危険が最終的に回避されるまで、半世紀にわたって教会は分裂しました。325年のニケア公会議、381年のコンスタンチノーブル公会議、451年のカルケドン公会議を経て、カトリック教会はその信条において“父と一体(homoousios)なる主イエス・キリスト”を宣言するに至ったことは、意義深いことでありました。

現代の教会が、使徒たちが伝えた福音に正しく耳を傾けて“目を覚ましている”ことの大切さを、天上のキリストは今朝の福音を通して訴えておられます。

2. ヘブ

v.18 「罪と不法の赦しがある以上、罪を贖うための供え物は、もはや必要ではありません。」

イエス・キリストの二度目の出現(9:28)を待っている教会にとって、時代が変わったからといって、“新しい福音”や“新しい信仰”が必要になるのではなくて、教会が使徒継承によって受け継いで来た福音と信仰に固く立つことこそが死活問題であることを、私たちは再確認しなければなりません。

20世紀の後半のキリスト教は、これまで他宗教に対してキリスト教絶対主義(排他主義)を貫いて来た姿

勢から、他の宗教にも救いの可能性を認める包括主義や、さらに進んだ宗教的多元主義への方向性を示すようになりました。第二バチカン公会議の主要なテーマの一つとなったアジュールナメント(現代化)も、そのような流れに従ったものであると言われています。

しかし私たち現代のキリスト信者が、生きている者と死んだ者を裁くために来られる終末のキリストを軽視し、教会が受け継いで来た福音をもし安易に“別の福音”(ガラ1:7)に乗り換えようとするなら、「あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになる」(Iコリ15:17)という使徒パウロの警告に耳を傾ける必要があります。

3. ダニ

ダニエル書が成立したマカバイ時代は、すでに預言者の時代が過ぎ去って、黙示文学の時代でありました。ダニエルという伝説的な人物に結びつけて、当時のユダヤ人に遠い昔の黙示という形で、励ましと忍耐を勧めたのでした。その中に、旧約聖書において最初の明確な死者の復活の希望が出て来るのが、今朝のテキストです。救済史の神への信仰、その救済史の完成への熱き待望は、かつての預言者から受け継いだ尊い信仰の遺産でありました。

この時代の、確かにほのぼのと昇る新約時代の真の太陽の微光の映像を、新約聖書がキリストの預言として受け入れたことは言うまでもありません。「お前の民」「お前の民の子ら」(v.1)はダニ7:18,27の「いと高き方の聖なる民」のことであり、「目覚めた人々」「多くの者の救いとなった人々」も先にダニ11:33に言及されている迫害の中にある民であるに違いありません。

教会がイスラエルから受け継ぎ、使徒たちの宣教を通して今日に至るまで聞き続けて来た救済史の完成への希望は、この世が終わる終末の到来を抜きにしては実現しないことを、理解しましょう。

主イエスは言われました。「これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」(マタ13:30-31) ハレルヤ、アーメン。

11月26日 王であるキリスト

ダニ 7:13~14 黙 1:5~8 ヨハ 18:33~37

1. ヨハ

イエスがピラトによって処刑された訴えの中で最も決定的なものは、彼がユダヤ人の王であると自称したというものでした。恐らくそれは客観的な印象であったと思われます。しかしそれは福音の本質から言えば、まさに「わたしが王だとは、あなたが言っていること」(v.37)に過ぎないというのが、原始教会の理解でありました。この点に関してヨハネ福音書は、先に成立していた共観福音書の記事を少しも変更していません。

キリストは死者の中から復活して父なる神の右の座に着き、神の国の王とされました(ロマ 1:4、フィリ 2:9 参照)。ヨハネ福音書が「わたしの国は、この世には属していない」(v.36)というイエスの言葉をピラトとの問答に加えたのは、そのことの確認のためでありました。

キリスト教の目的は地上に神の国を建設することであるという主張が、19世紀以来の教会の中で繰り返し形を変えて登場して来たことを、私たちは知っています。この類の考え方は、現代の我が国の多くのキリスト者の間にも漠然と存在しています。しかし使徒たちが伝えた福音によれば、それは天に属する国であって、地上の教会はその芽生えと開始であるとはいえ、その完成する終末の日の到来を渴望しているのです(教会憲章 6、ヘブ 13:14)。

2. 黙

v.7 「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る。…… 然り、アーメン。」

神の国を完成する方は、歴史のキリスト教の中に出現する活動家でも改革者でもなくて、天から来る再臨のキリストであります。“王であるキリスト”とは、「私たちが愛し、御自分の血によって罪から解放してください」(v.5)方、「二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださる」(ヘブ 10:28)方に外なりません。「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(v.8)こそが、私たち教会の“王であるキリスト”です。

ですから、私たち人類が生きて来た歴史の舞台としての“この世”は、その日には終わるのです。到来する神の国と“この世”の間には断絶があって、連続してはいません。その日には“王であるキリスト”が言われます。「見よ、わたしは万物を新しくする。…… わたしはアルファであり、オメガである。初めてあり、終わりである」と(黙 21:5-6)。

福音を通して教会に与えられた約束は、神の国を受け継ぐことであって(エフェ 3:6)、“この世”は滅びに定められています(ロマ 8:20-21、1コリ 15:24)。ですから「その日には、太陽は暗くなり、…… 星は空から落ち、天体は揺り動かされる」(マコ 13:24)という象徴的表現が、最もよく事柄を説明しているのです。

3. ダニ

福音書において、主イエスは御自分のことを指して“人の子”と言われました。その中でも“人の子”の終末の日の到来を預言されたテキストは、v.13の“人の子”のような者」と何らかの結びつきがあるように思われます。

ダニエル書において確かなことは、この“人の子”のような者」とは v.22の「いと高き者の聖者ら」v.27の「いと高き方の聖なる民」の象徴として描かれているということです。一方は天から、他方は地から来るのではなく、v.14で王権を受ける「その国」(v.27)は天から、つまり神によって出現するという理解が述べられているのです。

私たち教会が神の国を受け継ぐのは、私たちがキリストのものだからであり(ガラ 3:29)、教会は「キリストと共同の相続人」(ロマ 8:17)なのです。再臨のキリストが天の雲に乗って来られるように、神の国も天から来るのです。“この世”がその日には終わるということと、教会が神の国を受け継ぐということは、一つに結びついています。

典礼暦の最後の主日は、代々の時代の教会と共に私たちが今もなお待望している“王であるキリスト”の祭日であります。 ハレルヤ、アーメン。